主観的感情特性尺度の作成

—基本感情に基づいた感情特性の各特徴について—

○平井 花

(学習院大学大学院人文科学研究科)

Key words: Affective Trait, Emotion Regulation, Subjective Emotional State

目 的

人がある感情を経験する傾向を指す、感情特性という概念については、尺度作成がなされた上で、人の認知や特性、精神的健康度等との関連が指摘され、研究が行われている。

感情特性の測度としては、ネガティブ感情・ポジティブ感情・中性的感情等の次元で測定するもの(水子・寺崎・金光, 1992)と、Izard, Libero, Putnam, & Haynes (1993)らが研究しているように、喜び、怒り、悲しみ、恐怖、嫌悪感、驚き等に細分化するものがある。また、前者が普段、もしくは現在の感情状態を値として用いるのに対し、後者はそれぞれの感情を感じる頻度を値として用いている。しかし、感情状態や感情の経験頻度は、測定した時点の出来事の影響を強く受ける可能性があると考えられ、それらが個人の感情特性を十分に反映しているかについて、疑問が生じる。

そこで本研究は、6つの基本感情(喜び・驚き・悲しみ・怒り・嫌悪・恐怖)をベースとした主観的感情特性尺度の作成を試みた。また尺度作成後、日々の感情状態を報告してもらい、主観的感情特性が感情状態を予測するかを検討した。

研 究 1

方 法

■参加者： 大学生 192 名(男性 110 名, 女性 80 名, 不明 2 名)が参加し、平均年齢は 20.22 歳 ($SD = 1.14$) であった。
■質問紙： 主観的感情特性尺度として、①私は〇〇の感情を、感じやすいと思う、②私は〇〇の感情に、疎いと思う、③私は何か〇〇を感じるようなことがあると、すぐ〇〇な気持ちになる、④私は〇〇を、長い間感じ続ける方だ、の 4 項目を取り上げ、基本感情 6 個について同質問項目を実施した(5 件法, 計 24 項目)。また各感情を示す形容詞を 3 つずつ取り上げ、感情状態を測定する質問 18 項目を設定した ($\alpha_s = .760 - .870$)。その他、個別情動尺度 IV 版 (Izard et al., 1993) の一部、感情調節尺度 (吉津・関口・雨宮, 2013)、精神的回復力尺度 (小塩, 2002) によって質問紙を構成した。
■手続き： 集団に対し上記質問紙を実施し、約 1 か月後、同集団に対して主観的感情特性尺度の質問紙を再度実施した。

結 果

質問紙調査の結果、 $\alpha_s = .545 - .778$, 再テスト信頼性が $rs = .433 - .675$, 個別情動尺度 IV 版との相関が $rs = .258 - .665$ となり、概ね信頼性・妥当性のある尺度が作成された。また、感情調整・回復力の下位項目と各感情特性との間に相関関係が見られた(表 1)。

表 1 感情特性と感情調整・回復力の下位項目の相関。

	楽しさ	驚き	悲しみ	怒り	嫌悪感	恐怖
新奇	.30**	.03	-.20**	-.11	-.17*	-.12
感情	.16*	-.19**	-.45**	-.52**	-.43**	-.20**
未来	.29**	.04	-.04	-.06	-.22**	.01
再評価	.25**	-.01	-.07	-.23**	-.21**	-.11
抑制	-.08	-.14	.12	-.22**	-.09	-.12

* $p < .05$, ** $p < .01$

研 究 2

方 法

■参加者： 研究 1 に参加した参加者の内、大学生 142 名(男性 76 名, 女性 63 名, 不明 3 名)が研究 2 に参加した。平均年齢は 20.12 歳 ($SD = 1.16$) であった。

■質問項目： 研究 1 で用いた感情状態に関する質問項目 18 項目について、1 日に 3 回、1 週間継続して参加者に回答してもらった。更に 8 日目に、同質問項目について、1 週間を振り返って回顧的に回答してもらった。また、感情状態に関する質問項目は REAS (リアルタイム評価支援システム) を用いてインターネット上に作成され、参加者は個別に携帯電話から回答した。

■手続き： 事前に研究の目的・手続きについての説明会を実施し、研究内容について同意した参加者が本実験に参加した。また説明会の際に、携帯電話からアンケートに回答できるかの確認作業を併せて行った。説明会の後、参加者は 1 日 3 回定時に、8 日間継続して、質問項目に回答した。調査が開始された後は、定時になると実験者から参加者に対してメールが送られ、参加者はメールで指定された URL にアクセスすることによってアンケートに回答した。

結 果

各感情特性を説明変数、1 週間の感情状態の平均値と 8 日目の回顧的な感情状態の値を基準変数として単回帰分析を実施した結果、主観的感情特性が 1 週間の感情状態の平均値を予測していることが示された。その一方で、8 日目の驚きの感情状態については、予測しなかった(表 2)。

表 2 感情状態を基準変数とした単回帰分析の結果。

	1 週間平均		8 日目	
	β	R^2	β	R^2
楽しさ	.38**	.14**	.28**	.07**
驚き	.32**	.10**	.06	-.00
悲しみ	.33**	.11**	.34**	.11**
怒り	.29**	.08**	.40**	.15**
嫌悪感	.35**	.12**	.25**	.05**
恐怖	.23**	.05**	.20*	.03*

* $p < .05$, ** $p < .01$

総 合 考 察

研究 1, 2 の結果、概ね信頼性・妥当性のある主観的感情特性尺度が作成され、それが実際に日々の感情状態を予測することが示された。しかし一方で、感情によっては尺度の信頼性が十分でない部分もあり、驚きの感情特性は回顧的な感情状態を反映していないことも明らかとなった。この結果は、それぞれの感情の特徴に起因する部分もあると考えられ、驚きという感情は比較的短時間で消失すること等が今回の結果に影響を与えたと推測される。今回の調査から、今後感情特性を測定する尺度間で更なる比較を行い、感情特性の実態・定義を明らかにする必要があると考えられる。

(Hana HIRAI)